

日中：謝罪・感謝の勘違い (下)

齋藤 文男

中国人はなぜ“自己中”の人が多いのだろうか。そうしなければ、競争の激しい生活の中で埋没してしまうのかもしれないが、それよりも生活習慣文化に由来しているように思う。

家族で「ありがとう」は他人行儀

私の教え子で南京大学から北京大学の大学院で修士号を取得した後、日本企業に勤め、日本で6年間生活した女性がいる。長年日本語を学び、日本で生活していて日本人の感覚に近くなった。久しぶりで中国の故郷に帰って母親と一緒に食事をした時、母親が箸を取ってくれたので、「ありがとう」とお礼を言った。すると母親は「どうして、そんなことでお礼を言うの?」と、とがめるような口調でたしなめたという。

教え子の女性は、日本人と一緒に食事をする機会が多く、食卓ではちょっとしたことでも、日本人と同じようにお礼を言う習慣になっていた。故郷に戻ってもこの習慣から母親にお礼を言ってしまった。中国では家族同士が些細なことでお礼を言う習慣はあまりない。箸を取ってあげることなど、家族ならば当然のことであり、ことさら「ありがとう」などと言われれば、他人行儀になってしまうのである。日本人がアメリカ映画の中で、夫婦が一日に何回も「I love you」を繰り返すのを見て、違和感を覚えるのと同じような感覚なのだろう。

複数の感謝は「また、ほしいのだろう」の意味?

中国人の学生や友人同士でも、日常茶飯事のことで「ありがとう」「ごめん」などの会話はほとんどないという。私が中国人の友人に日本からのお土産を手渡しても、欧米人のような大げさな感謝の態度や言葉はなく、「ああ、ありがとう」と言って土産をその場に置いたままである。日本人の場合は、その場で丁寧にお礼を言った後、翌日に会えば「昨日は大変ありがとうございました」と、必ず改めて感謝する。1週間後なら、「先週は、わざわざありがとうございました」というだろう。数カ月後ならば、「その折は、お世話になりました」と、機会あるごとにお礼をいう。しかし、中国人からお土産をもらって、日本人から何回もお礼を言われると「また、ほしいのだろうか」と、中国人は感じてしまうようだ。

肩がぶつかったぐらい「何でもない」

こんなこともあった。地下鉄の地下道や市街地の繁華街を歩いていると、大勢の人と肩などがぶつかる。若い女性とかなりの勢いで衝突することもある。まるでラグビーかアメフトの試合をしているような感じで、ぶつかりながら人混みの中をかき分けて進んで行く。しかし、相手は平然とした態度と表情で過ぎ去って行く。日本人なら「人にぶつかっておいて、何のアイサツもないのは、どういうわけだ!」などと路地裏に連れ込まれかねない。

人混みの中で通行人と衝突することは度々あったが、相手に何の反応もないのを不思議に思い、授業の話の中で学生に訊いたことがある。女子学生は「肩がぶつかったぐらいで、けがをしたわけではないので、なんでもありません」ときっぱり。日本人なら「ガン飛ばした」などと、視線があっただけでけんかになることもある。

私が二胡を習っている50歳代の先生に、「謝謝、謝謝」と何か付けてお礼を言ったら、「私たちはもう長い付き合いで友人なのだから、毎回お礼を言わなくてもよい」と言われた。仕事上のことや初対面の他人などの場合は、自分の責任かどうかを明確にする場合があるだろう。そのことが日本人から見れば、責任転嫁をしているように感じるのかもしれない。家族や友人間では、些細なことでいちいち謝罪や感謝をすればかえってよそよそしくなってしまうのである。

私はバスや地下鉄に乗っているとき、小学生や 20 歳代の女性から何回も席を譲ってもらったことがある。混んだ地下鉄の中で、中年の男性から背中をたたかれ、後ろの席が空いたことを知らされたこともあった。満員のバスの中では、車掌から切符を買うとき最後部座席から現金を出したら、中にいた乗客 10 人ほどが次々に手渡しで現金を車掌まで運び、釣銭と切符が 10 数人の手を経て手元まで届いた。通常の生活では、中国人の温かい思い遣りと親切心で“まほらまの南京生活”を送ることができた。

理解が難しい日本人の「すみません」

大学構内ではこんなこともあった。朝 8 時からの 1 時限目の授業に行く時、少し急いでいた。車の脇から出て来た学生の自転車と正面衝突した。学生はとっさに「自転車は右側通行じゃないですか」と主張した。私は右側を走っていた。学生は左側を走り、車の陰から飛び出して来たのだ。学生は自分が左側を走ってきたことに気が付き、「对不起」（トゥイ・プ・チイ＝すみません）と謝った。

私は中国人からこの言葉をめったに聞いたことがなかった。意味は「あなたに対して頭を上げることができないほど、すまないと思う」である。日本人はレストランで店員を呼ぶ時「すみませ〜ん」などと軽い気持ちで呼び掛けるが、それとは異なり中国語の謝罪の言葉は、かなり深刻な表現なのである。店員を呼ぶ時に、頭を上げることができないほど恐縮する日本人の「すみません」を、中国人はなかなか理解できないだろう。日中言葉の問題は 1972 年の国交回復時に、田中角栄首相が晩餐会で挨拶したいわゆる「ご迷惑発言」の中国語翻訳以来、いまだに解決していない。日中双方で幅広い生活文化の相互理解が、今こそ必要になっている。



登下校時には人や自転車、車で混雑する南京大学正門前（2008 年 5 月 27 日、筆者写す＝横断幕は「温暖な南大は我が家」の意）

（さいとう・ふみお）毎日新聞OB。1941 年生まれ。元中国・南京大学日語専攻。